

Book Review



非抜歯矯正治療

Molar Oriented Orthodontics の実際

有本博英・賀久浩生・篠原範行 著



Reviewer

浦野 智

(大阪市・浦野歯科診療所)

A4 判変, 288 頁
定価 23,100 円
(本体 22,000 円+税 5%)
医歯薬出版刊



このたび、有本博英先生、賀久浩生先生、篠原範行先生の共著による『非抜歯矯正治療』が医歯薬出版より刊行された。この本についての書評依頼を最初に受けたとき、矯正治療については全く門外漢の私に書けるはずがない、と思った。ところが読み進めるうちに、この本は単に「矯正治療」について書かれたものではなく、「歯の位置から見た歯科治療」の考え方について書かれたものである、ということがわかった。そこで、一般歯科医からではあるが、「非抜歯矯正治療」について述べてみたいと思う。

まず、第1章の「治療哲学」においては、矯正治療の歴史的な流れについてまとめられている。Angleの最後の高弟と言われた Tweed と、非抜歯矯正治療の伝説的臨床家である Cetlin の時代に遡って当時の変遷が記載されており、非抜歯から小臼歯抜歯矯正に転向した Tweed のおかれていた環境など、当時を垣間見ることができる。

さらに、小臼歯抜歯矯正の基準となる IOO (incisor oriented orthodontics) と、Cetlin らが推奨した非抜歯矯正の基準となる MOO (molar oriented orthodontics) との違いについ

て、わかりやすく述べられている。いわゆる「非抜歯」ありきの矯正治療ではなく、「臼歯の位置づけ」を基準とした矯正治療であるがゆえに、結果的に多くの症例に対して非抜歯で対応できる、という著者らの考えの根幹となるところであろう。

続いて第2章の「治療戦略」では、臼歯のリポジショニングから切歯のリポジショニングへ、という MOO による治療の大きな流れが示されている。また、「臼歯の遠心移動が可能か？」や、「ポステリアディスケレパンシー」など、非抜歯矯正においてよく挙げられる質問に対しても、著者らの考えのみではなく、多くの文献などによる根拠とともに明確に回答されているので、読者のさらなる理解を促す内容となっている。

第3章の「治療戦術」以降は、より具体的な矯正治療術式の解説からなる。臼歯のリポジショニング、切歯のポジショニング、Finishing と、まさに実際の治療の流れに沿って項が進められている。治療の目的に合った術式の考え方や選択基準が詳細に示され、また各術式、装置の意義、原理、およびその実践が、豊富な臨床写真やイラ

ストとともに提示されているので、日常臨床では矯正治療を行わない私にも非常に理解しやすい内容であった。

最終章の「MOO の臨床」では、著者らが行った 16 症例が供覧されている。それぞれ、著者らの治療に対する思いが伝わる症例で、まさに「非抜歯矯正治療」の集大成であろう。ただ、この章においても読者が自身の臨床にすぐに応用しやすいようにと、著者らが採用した装置やシークエンスなどが明確に記載されており、実践にも有用である。

また、各章には 8 題の「コラム」が載せられているが、決してこれも単なる「ひと休み」ではなく、最新のトピックスや概念に対する見解などが述べられており、興味をそそる内容である。

矯正治療医にとっては、「非抜歯矯正治療」の根幹を深く理解し、さらに臨床に応用するうえで必読の書であろう。また、著者らと私は、主に矯正治療と歯周治療を通して連携治療を行ってきたが、一般臨床医にとっても連携治療を進めていくうえで、矯正治療に対する哲学をより深く理解することができ、より正当性のある歯科治療を提供できるようになると思われる。